素敵な大人のラブコメを。

ルコ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

結局の所、三浦×八幡が１番しっくりくるわけで…。

なるたけ甘々なラブコメを書いていきます。

目　次

星降る夜空に静寂を ―― 1
扇情的な夜に愛情を ―― 11
眠れぬ夜に会合を ―― 20
恐怖の寒さに友情を ―― 26
常識外れに常識を ―― 34
甘い砂糖と買い物を ―― 45
時間の進みに戒めを ―― 53
ゆるりと甘い口溶けを ―― 59

星降る夜空に静寂を

星降る夜空に静寂を

煌びやかに飾るシャンデリアに照らされ、豪華に彩る店内の赤いカーペットを歩く。
右も左も丸いテーブルを囲うように並ぶソファー。
そこには、スーツの中年を中心に、露出度の高いドレスで着飾った若い女性従業員…、所謂キャバクラ嬢が楽し気にボトルを注いでいた。

あそこのハゲは金出しも手癖も悪い。
そっちの金縁メガネはゲスい同伴を強要する。
そこの茶髪パーマは近場のホストクラブで働く下流ホスト。

今日の客層は金入りが悪そうだ。

ふと、ホール係があーしに目配せをし、丁寧なジェスチャーで行く先を指し示す。

そこは上級顧客用の個室席。
どうやら指名が入ったようだ。
一発目の客引きで個室とは、今夜はついているのかも…。

絞れるだけ絞り取ろうと算段を立て、あーしは個室の扉を開ける。
「どーもー。優美子でーす」

ーーーーーー★

個室にはすでにグラスと氷、日本酒が用意されていた。
あーしは手慣れた手つきでグラスに氷を入れていく。
「柴山さん、今日はお一人？」
「2件目で専務が酔いつぶれちゃってね。専務の介護をしている若いのがもうすぐ来ると思うよ」
そう言って、柴山さんはあーしから受け取った日本酒のロックをゆっくりと傾けた。
とある上場企業の課長である柴山さんの年収は一千万を超える。
身につけるスーツのブランドや小物類から推測された物で確かではないが、私たちキャバクラ嬢にはそういった情報から客の年収を導き出し、進めるアルコールを決めるのだ。
「優美子ちゃんも好きな物を頼みなさい」
「んー、あーしも日本酒にするし！」
客層にも色々な奴がいる。
先の手癖の悪い奴や、同伴を求める奴。
お客は神様だと言わんばかりに振る舞う奴。
そんな客層の中でも、柴山さんは丁寧にアルコールを入れ、悪酔いする事もなく、余裕のある会話をしてくれる。
ふと、柴山さんはため息を吐きながら口を開いた。
「専務がね、若い社員に無理やり飲まそうとするんだ。…ほら、このご時世だとパワハラだとか、アルハラだとか言われちゃうから…」

「へぇ。ゆとり世代ってやつ？」
「はは。確かに、一杯目から烏龍茶を注文した子には驚いたよ」
小さく笑いながらグラスを傾ける姿は、どこか疲労感さえも漂わせる。
中間管理職と言うのだろうか、上にも下にも気を配らなくてはならない立場ともなれば、相当な神経を使っているのだろう。
あーしには分かんないけど。
「でもは、若いのに1人、やけにアルコールに強い子が居てね。その子に気を良くした専務が飲み比べを始めちゃって」
「あー、若い奴が潰れたんだ」
「逆だよ。専務が先に潰れてね。それなのに、その子はピンピンとしてるんだーーー」

ーーー♪

ふと、柴山さんの話を遮るようにスマホの電子音が鳴り響く。
それが柴山さんの胸ポケットから鳴っている物だと気付くや、彼はそれを取り出し耳に当てた。
どうやら電話のようだ。
「はいはい。……うん、ありがとう。タクシー代は後で請求しておくよ。……うん、それならこっちへ飲みにおいで。僕だけしか居ないから気を使わなくてもいいだろう？」
その間、あーしは会話を黙って聞きながら日本酒を流し込む。
会話の内容から、電話相手はおそらく柴山さんの言っていた若い部下であろう。
「……。あ、ごめんね。さっき言ってた若いのからだよ」
「アルコールに強いって言う？」
「うん。…賢い奴だよ。見てて面白い程にね」
「…へぇ」
電話の話し口調から察するに、その部下と柴山さんの間にはそれなりの良好な関係築かれているみたい。

あーしは空になった柴山さんのグラスに日本酒を注ぎながら、その賢い奴とやらに興味を覚えていた。
ココで養ったあーしの目に狂いが無ければ、柴山さんは良識的で社会的な頭の良さを持つ人だ。
そんな人が賢いと評する人間に、あーしは興味があった。
「不躾だけど、優美子ちゃんって２４歳だったよね？」
「年齢詐称とかしてないし！」
「はは、ごめんごめん。それなら同い年だなって思ってね」
その若い部下と？
と尋ねる前に、ホール係が静かに扉を叩いた。
ゆっくりと扉を開けると、片膝を付きながら、此方です。と扉の外の人物に呟く。

ふわりと、どこか甘そうな香りを漂わせるスーツの若い男。
跳ねたアホ毛がふらふらと彷徨いながら、少しばかり幼ささえも残した彼は、個室に入るや気まづそうな顔で柴山さんに軽く頭を下げた。

「…遅くなりました」
「ふふ。ご苦労様。座りなよ」

あーしはそいつの顔を覚えている。
高校生の頃に1年間同じクラスだったから。
そいつを中心としたヘンテコな部活に、幾度か助けられた覚えもある。
あーしの親友と天敵と…、そいつを含めた3人が作った暖かな空気は羨ましい程に輝いていて、妬ましくて、羨ましくて、妬ましくて…。
あぁ、そうだ。
3年生のあの時、彼が奔走して結衣を救ってくれたんだ。

それを知っておきながらも、あーしは誤解を解くこともなく、彼が演じた悪役を黙って傍観していたんだ。

「ビールで良いか？
ーーー比企谷」

ーーーーー★

……
……
…
・

俺がフられた腹いせにーーーー
こんな事になるなんてーーーー
すまなかった、由比ヶ浜ーーー

・
…
……
……

背中を伝う汗が酷く冷たい。

あーしはそいつから目を反らすことが出来なかった。
「ーーちゃん?ーー、優美子ちゃん?」
「っ!?…へ、へ?」
柴山さんの声に、靄の掛かった頭が覚醒する。
「どうしたの?気分悪い?」
「いや…」
心配そうにあーしを見つめる柴山さんの横で、そいつはメニューを睨みながら小さく、高ぇ…、と呟いていた。
き、気づかれてない?
「ビールを瓶で、あとは適当に頼んで」
「う、うん…」
そう言いながら、柴山さんは5万円をあーしに手渡して席を立つ。
「比企谷、適当に飲んでていいから。俺は先に帰るよ」
「ちょ、それなら俺も帰りますよ」
「もうお金払っちゃったから。それに、気を使ってばっかで疲れたろ?」
「ここで1人にされる方が疲れそうですけど!?」
「ははは。それも経験だよ。それじゃ」
スマートに身支度を済ませ、柴山さんは手を小さく振りながらその場を後にした。
途端に1人きりとされたためか、そいつの顔には強張りが見られる。
それは恐らくあーしにも…。
とりあえず、持ってこられたビール瓶を手に持ち、そいつにグラスを持つように促してみた。
「ぐ、グラス出せし」
「あ、はい。どうもです。あ、俺も注ぎますよ」
「客に注がれてたまるかっての」
「そっすか……」
どっちが客か分からない態度だ。
普段のあーしも少し無礼な所はあるけど、今日はより一層無礼なこ

とに間違い無い。
……。
この状況、どうすればいいの？
「…美味いです」
「あ、あーしが注いでやったんだから当然だし」
「……」
「……」
「……」
「……」
「そろそろ気付けし!!!」
「!?」
突然の大声に、そいつは傾けていたビールを少し吹きだした。
ソファーに並ぶ５０センチの距離。
それにも関わらず、そいつから漂う甘くて優しい香り。
ふわりとした柔らかそうなアホ毛がビクンと震える姿は、少しばかり母性を擽る。
「あーしだよ！あーし！三浦　優美子!!」
「あ、あーし…だと…？…おまえ、三浦か？」
驚愕に目を見開くそいつの姿は、高校生の頃の面影を少し残しているようだった。
「ヒキオでしょ!?あんたヒキオでしょ!!」
「…なんだ、おまえ三浦か…。緊張して損したわ」
「なんでだし！あーしの可愛さに緊張しろし！」
「…なんなんだこの店員」
緊張の糸が切れたように、ヒキオは肩の力を抜きながら、ダラシなく腰を深く座り直す。
身につけていた堅苦しいネクタイを緩め、ワイシャツのボタンを一つ外すと、持っていたグラスに自らビールを注いだ。
「…ほら、別に今更客扱いされても心地悪いから」
「ふん」
そう言って、ビール瓶をクイっとあーしに向ける。

あーしは無愛想にグラスを差し出すと、グラスの縁に泡が到達するラインまでビールが注がれた。
個室でこうして、この男と並んで酒を飲むなんて…。
予想だにしなかったことに一瞬慌てたが、パーソナルエリアへ踏み込もうとしないヒキオの態度に安堵する。

【…優美子は…。
いや、何でもない。】

無理矢理に作られた優しい表情と、哀れな物を見るような瞳。
彼の顔を思い出す度に、冷たく重い何かが心を支配しようとする。
「……っ」
「…？」
「の、飲めし！金なら腐る程貰ったんだかんね！」
「腐る程は貰ってないだろ…。おまえ、変わったな…」
「は？」
あんたがそれを言う？
教室では異物のような存在で、何を考えているのか分からないような奴だったヒキオが、一丁前にスーツを着て、上場企業に勤めている。
いや、頭が良かった記憶はあるから、コイツなりに努力して得た現在なのだろうけど…。
「…あーしが変わったって、あんたに何が分かんだし」
「…何も知らん。おまえの事なんて一つも知ろうとしたことがないからな」
「あ!?喧嘩売ってんの!?あーしの拳にはあんたの頭蓋骨を貫く程の威力があるかんね！」
「…ぼ、暴力はやめません？…、前は自信に満ちてて、賛否の否を無にするような奴だったろ」
「哲学かよ…」
あーしはヒキオの頬を拳でグリグリとしながら、空いたグラスにビールを注ぐ。

「みゅむむ…。や、止めろ…」
「なんだし！なんなんだし!!…結衣や雪ノ下さんには優しかったクセにっ！」
「優しくした覚えなんて無いが…」
「…っ、見下す気なの？あんたもあーしをっ……！」
だめだ。
言ってはだめだ。
言ったらあーしは、きっと暗い底まで落ちてしまう。
ちゃんと自分に嘘をつけ。
この仕事を誇りに思うと噛み締めろ。
後ろめたさや不安を、包み込むように…。
「今のおまえは少し面白い」
「…は？」
「…何でもない。俺もそろそろ帰るわ」
ぼそりと何かを呟いて、ヒキオはゆらりと席を立つ。
ハンガーからジャケットを取ると、それを着ることなく小脇に抱えた。
「またな。三浦」
言葉少なにそう言うと、ホール係を呼びつけ店内を後にする。
静かな嵐みたいな男との不思議な再会は、ものの数十分で終わったのだ。
「…ふん。余裕振りやがって」
あーしは胸元から名刺用紙を取り出した。
それは、ヒキオのジャケットからこっそり引き抜いた彼の名刺。
表に書かれた比企谷　八幡の名前と、会社名が、間違いなく奴の物だと知らしめる。

「イタズラしてやるし…。ん？」

ふと、その名刺の裏を見る。
雑に書かれた大きな文字。
思わずあーしはソレを破り捨てそうになる。

ーーーーーーーー

バカめｗｗｗ

ーーーーーーーー

扇情的な夜に愛情を

夜の勤務が終わり、太陽が薄っすらと登り始めた頃。
仲の良い同僚に飲みへ行こうと誘われたが、あーしはもやもやと覆う心の陰りからか断りをいれた。
むすっとする同僚のおデコをごめんねと突きながら、着替えを済ませて店を出る。
早朝の繁華街は、夜の面影を残しつつもどこか物悲しい。
今は朝の５時ーー。
駅に向かえば始発の電車が動き出す頃合いだろう。
ココから借りている部屋の最寄駅までは４駅で２０分程だ。
死ぬほど面倒だとは言わないが、軽く面倒臭い。
「…はぁ」
ふと、ため息を一つ吐きながら、あーしは無造作にポケットへと手を突っ込む……、む？
指に触れる角張った感触。
確認せずとも分かる。
それは昨夜にあいつの懐からコッソリ引き抜いた名刺だ。
「…むぅ」
大きく雑な字で書かれた【バカめ】の一言。
見た時は腹が立ったけど……、なんとなく…、本当になんとなくだけど、ーーー
ーーーふんわりとした懐かしい暖かさを思い出していた。
「…ＬＩＮＥのＩＤくらい書いとけし…」
などと呟いてみるも、その名刺にＬＩＮＥのＩＤが浮かび上がってくるわけもなく。
気付けば改札を通りホームに立っていた。

電車の到着を待ちながら、あーしはおもむろにスマホを取り出す。
新着のＬＩＮＥの報せに既読のみを付け、流し見しながら３００程を数えるＬＩＮＥの友だち欄に目を移した。
グループＬＩＮＥ……。
そのグループＬＩＮＥの一つ、ほとんど使用したことの無いグループ、【奉仕部】の存在に目を見開く。
「……」
記憶を遡る。
そうだ、これは確かバレンタインデーの時、奉仕部へ相談に行った際に結衣が半強制的に作った物だ。
悪くない。稀に見る良運。
あーしはそのグループＬＩＮＥの中に存在するヒキオのＬＩＮＥを開く。
ＬＩＮＥ、送ってみようかな…。

優美子ーーーーー
覚えておけし。
二度と来んなクソ野郎。
ーーーーーーーー

送信っと……。
…さ、さすがにクソ野郎は言い過ぎたか？
昨夜の件は、ただあーしが自己嫌悪に陥っただけだし…。
「…うう」
やんわりと、ヒキオがあーしに向けた暖かな視線は嫌いじゃなかった。
人間味のある喋り方や、取り繕わない物言いも、ちょっとだけ昔の素直だった頃の自分に戻らせてくれたような気がして。
ホームでただただ立ち尽くすあーしは、電車の到着を待つ間に、ひたすらスマホを睨みつけていた。
既読の付かないメッセージ。

今ならまだ、間に合うのかもしれない。

優美子ーーーーー
ウソ。
また来い。
ーーーーーーーーー

ーーー☆

「はい！優美子ちゃんにプレゼント！」
ギトギトな前頭葉を見せびらかすように、加齢臭を漂わせた中年の客が満面の笑みを浮かべる。
手のひらサイズの四角い箱には可愛らしいリボンが結ばれており、それが中身を開けずとも、指輪であろうと予想が出来た。
「なにコレ。くれんの？」
「当たり前じゃないか！」
鼻息荒く顔を近づけてくるおっさんから自然に距離を取り、あーしは差し出された下心を受け取る。
気に入れば身につけよう。
気に入らなければ売ればいい。
そうやって、部屋に転がる数々のアクセサリーは嫌味に光っていて、貪欲で貧困な想いが込められていた。
「ほら！開けて開けて！」
嬉々とした中年に、包みを開けるよう促され、あーしは丁寧なリボンで包まれたソレを乱暴に開封する。

ようやく顔を出した黒く小さな箱をパカっと開けると、そこにはやはり銀色に光る指輪が。
…へぇ、悪くない。
「どう?どう?可愛いだろう?」
「うん。まぁまぁ気に入った」
「あふん。それはよかった」
邪な吐息を吐き出しながら、中年はあーしの肩に手を回した。
お触りが強く禁止されているわけではない。
貢いでくれる客には適度に触らせる。
渇いた手のひらに肩を撫でられると、ザラザラとした嫌な感触が直に伝わった。
冷え性なのか、店内の冷房が効き過ぎているのか、中年の手のひらはヒンヤリと冷たい。

自らの腕時計を見つめる。
時刻は２３：００に差し掛かる頃。
今日のシフトは早番のため、こいつが最後の客になるだろう。
ちらりと、ホール係に視線を送る。
それを受け取ったホール係は、やんわりとこちらに近づき、片膝をついてあーしに声を掛けた。
「優美子さん、移動をお願いします」
「んー。じゃ、コレありがとね。良かったらまた来て」
「あ、優美子ちゃん。うん、また来るよ」
肩に回されていた手を優しく解く。
中年は寂しそうな顔を浮かべながらあーしを見つめ続けているが構うことも無く、その足で店裏へと向かう。
髪をかきあげながら仕事用のドレスを脱ぐ。
鏡に映る黒のショーツだけの姿。
身体を売っても金になる、そうマネージャーに言われたことを思い出した。
引っ込むところは引っ込んでるし、出るところは出ている。

金になる程に完璧な身体だ。
「……はぁ」
何度目のため息だろう。
無意識に出るため息を数えることが出来るのならば、それは千を、万を超えているはずだ。
……何、やってんだろ。
帰って、寝て、仕事して。
金だけはあるから、休日になれば高い買い物をする。
それだけを繰り返す1年を何度も過ごして。
退屈な毎日に我慢する。
「……帰ろ」
着替えたブランド物に身を包み、裏口から店を出る。
重たい足取りはヒールの高さに比例して重力を強くしているようだった。
ふと、鞄の中でスマホが震える。
仕事のメールか、それともメルマガか。
なんの気無しに開いたスマホの画面に、あーしは思わず脚を止めていた。
ヒキオーーーーーー
店の近くに居る。
暇なら飲みに付き合え。
ーーーーーーーーー

・
…
……
……

あの再会から1週間。
あいつへ送ったＬＩＮＥに既読は付いたものの、それに返信が来る事は無かった。
だと言うのに、1週間何の音沙汰も無かったあいつが、途端に誘いのＬＩＮＥを送ってきたのだ。
自分勝手な自己中男。
普段のあーしならそう切り捨ててＬＩＮＥ消していたことだろう。
……それなのに。
あーしの脚は、そいつの指定した飲み屋へと向かって速足に動いていた。
飲み屋の前で軽く前髪を直し、店員に待ち合わせであることを伝える。
トクン、と。
鼓動が一つ高鳴った。
……。

「…よ。悪かったな、急に誘ったりして」
この前と同じスーツ。
ネクタイは前と違うけど、それを抑えるネクタイピンは変わらない。
「…ふ、ふん！偶々死ぬほど暇だったから来てやったし！」
「え、なにそのツンデレ…」
呆れたように目を細めながら、ヒキオは店員を呼びつけビールを2つ注文する。

「…あんた、仕事終わり？」
「まぁな」
特段に口が軽いわけではない男だ。
それでも、場を盛り上げようと詰まらない話をする奴らよりも居心地は良い。
届いたビールで軽く乾杯をし、それを一気に傾ける。
やっぱり仕事以外で飲むビールは美味しい。
「…ぷはーっ！うまいし！」
「!?…急に大きな声を出すなよ」
「うっせ！あんた、なんでＬＩＮＥシカトしたし」
「あ？返したろ、さっき」
「頭の時差を早く直せ！」
ヒキオのジョッキにはまだ半分程のビールが残っていた。
それに比べて幾分か減りの早いあーしは、近くを通った店員にビールを注文する。
目の前の男は何を思ってあーしをさそったのだろうか。
ムスッとしたり、へらへらとしたり、一言二言の返答に感じるヒキオの感情がどこか暖かい。
「…てか、急に誘うとか、あんたあーしのこと狙ってんの？」
「クソお花畑な頭だな」
「なにをー!?」
鼻で笑わんばかりに、ヒキオは冷めた目で私を睨んだ。
「…柴山さんってあそこの常連なんだろ？」
「は？…そうだけど…」
「おまえ、あの人に気に入られてるの？」
「なに？嫉妬？」
「……ま、俺には関係ねえけどよ。気をつけろよ」
「は？」
「…頭の悪い客ばかりじゃないってことだ」
ヒキオはそう言うと、残っていたビールをゆっくり飲み込む。
頭の悪い客。その言葉に、あーしは鞄の中で埋もれる小さな箱を思

い出した。
優しく接すれば貢がれる。
色目を使えば金を出す。
それがあーしの常識で、それ以上も以下もなく、普通なのである。
そういえば、あの頃から意味深な事を言う奴だった。
その言葉に少しでも耳を傾けていればと後悔したこともある。
これは、コイツなりの表現なのだろう。
「…むぅ。あんたって、相変わらずそーゆー感じなんだ…」
「あ？なんだよ、そういう感じって」
「……別に。はぁ、アルコールが足んないし。赤ワイン頼も。デカンタで」
「どれだけ飲む気だよ…」
あくせくと働き回る店員を捕まえ、あーしは注文を済ます。
目の前で腕時計を仕切りに確認し、時間を気にしている男の分のグラスも頼んでおいた。
「おまえ、時間は大丈夫なの？俺から誘っておいてアレだけど」
「は？もう終電無いっしょ」
「あらら。…じゃあ俺はこの辺で…」
「待てい!!」
ガシっと。
席を立とうとするヒキオの頭を掴む。
「ぬっ!?」
「あーしを置いて帰る気？」
「そらそうよ」
思わず掴んでいた手に力が入ってしまった。
アホ毛が左右に激しく揺れる。
この男はか弱い女の子を1人、居酒屋に残して帰ると言うのか。
……。
「…わかった。ならあーしに着いてきな」
「あ？」
コイツが意味深に何かを伝えると言うのなら、あーしはストレート

にコイツを翻弄してやる。
手取り早く。
どっぷりと深い夜に。
初心そうな男を弄んでやる。

「ラブホ行くよ」

眠れぬ夜に会合を

ネクタイを外し、第2ボタンまで開けたワイシャツの胸元から、健康そうに色付く肌が見える。
どこか華奢に見えた身体は、しなやかに引き締まった筋肉で男を感じさせた。
目の前の男はワイシャツを丁寧にハンガーへ掛けると、一つ、あーしに目配せをし浴室へと消えていく。
い、今の視線は……っ！
なんだし!?
「……っ」
ベットの上でぽつんと一人。
しばらくすると、浴室から水しぶきが床に当たる音が聞こえ出した。
顔が熱いと触らずとも分かる。
強く握った手をゆっくりと解しながら、あーしは自らの膝を優しく抱いた。
「ぁぅ…、うぅ…」
ピンク色に染まった部屋に置いてあるテレビを見つけ、なんとなくチャンネルで電源を点ける。
ぴっ
『あっ、あっ、いやぁっ……。』
ぴっ
な、なんでだし!?

なんでエロい番組が流れたし!?
おかしい…。
ここは異世界か？
ふと、浴室から聞こえていた水音が止まった。
ペタペタと、足の裏が床を鳴らし、それがゆっくりと近づいてくる。
「っ！ーーっ!!」
「……おまえ、何やってんの？」
背後から聞こえる声に、あーしの身体は固まった。
そっと振り返る。
そこには、濡れた髪をタオルで拭き、蒸気で顔を赤らめたヒキオが立っていた。
「ば、ば、ば、バスローブ!!」
「あ？風呂上がりにスーツなんて着たくねえだろ」
「か、か、髪も濡れてるし!!」
「…そりゃ洗ったんだから濡れてるだろ」
「あ、洗った!?なんで!?何を!?ナニをーー!?!?」
不思議そうな瞳をあーしに向けつつ、ヒキオはベットの隣に置いてある椅子に腰掛けテレビのリモコンを取った。
「あ!!」
「？」
ぴっ。
と、点けられたテレビから流れる地上波のテレビ番組。
お堅いスーツと眼鏡を身に付けたキャスターが、ニュースをスラスラと読み進めていた。
な、なんで…？
「…ぁ。ぅぅ…」
「…おまえから誘ってきたくせに、なに慌ててんの？」
「っ！…べ、別に慌ててないし！」
慌ててない、と言えば嘘になる。
それも当然だろう。
あーしはラブホに入るのが初めてなのだから。

「慌てて…、ないし…」
「……」
本気で誘った訳ではなかった。
遊びで誘うほど軽い女でもない。
ただ、あーしは。
こいつのことだから、ヘタレそうなこいつのことだから、あーしの誘いに慌てふためき、断られると思ったんだ。
それなのに…。
『…そうだな。行くか』
……。
意外にも、ヒキオは誘われたらクールに決めちゃう系だったらしい。
「…あ、あの、あーし…」
「…はぁ。別に襲ったりしねえよ。そう震えられるとこっちが悪い気がしてならん」
「ふ、震えてなんかないし！」
「外見に似合わず初心なんだな」
ヒキオはポツリと呟きながら、テレビの電源を落とす。
椅子からゆっくりと立ち上がると、あーしを見つめながらベットへと近づいてきた。
ふわりと。
あーしに向かって腕を伸ばす。
「…っ！」
ぽん。と。
頭に乗っかる暖かな感触。
それは何よりも優しく、あーしの頭を撫でた。
「高校生の頃、俺はお前に少し憧れてた」
「……へ？」
「献身的に一途であり続ける姿や、誰よりも強くあろうとする性格。
……叶わぬと分かりながらも突っ走れるお前が、俺は羨ましかった」
こそばゆく語られるあーしの評価に、思わず視線を逸らしてしま

う。
ヒキオ曰く、献身的に一途で、強いあーしは、叶わぬと分かりながらも突っ走っていたらしい。
叶わぬ……。
それが高校生の頃に経験した苦い恋愛のことだとは言われなくても分かる。
「……あ、あーしは、あんた達が羨ましかったし」
「…俺たち？」
「…。3人共、凄く……」
ーー綺麗で素敵だった。
互いに想い、互いに理解し、互いに…。
「…はは。そっか。それは隣の芝生は青く見えるってやつなのかもな」
「な、なんだし、それ…」
撫でられていた頭から手が離れる。
ヒキオは笑いながら、そっとあーしから距離を取ると、冷蔵庫からペットボトルの水を2つ取った。
片方をあーしに差し出しながら、そのキャップを開ける。
「飲んでる時に、おまえの鞄からリボンが見えた」
「それは…」
「客から貰ったんだろ？」
「…まぁ」
「…ん。気を付けた方がいい。いろいろとな」
気を付けるとは何に対してか。
このプレゼントを渡してきた中年にか、それとも、先ほど言っていた柴山さんにか。
多くは語らない。
それでも、ヒキオの言葉は胸に留まる。
「……わかった」
そう、一言を絞り出すことが精一杯で。
優しさに当てられたせいで熱くなった身体を、モジモジと左右に小

さく揺らしながら。

「…よし。それじゃあ俺は寝るから。おまえはソファーで寝ろよ？」
「へ？な、なんでだし！あんたがソファーで寝ろ！」
「ばっかおまえ、ソファーなんかで寝たら風邪引いちゃうかもしれないだろ」
「いいいいい一緒に寝ればいいでしょ!?」
「待て待て。俺はほら、今日はアレの日だから」
「あ、あ、あーしだってアレの日だし!!」

・
…
……

そんな眠れぬ夜に、妥協案として決めたのが、お互いに背中を向けて眠る事だった。
まさか、ヒキオと一つのベットで一緒に寝る日が来ようとは。
隣から聞こえる小さな寝息が規則正しく。
妥協案を振り絞る時に見せたヒキオの赤い顔が頭から離れない。
ヒキオもやっぱり照れたりするんだよね…。
なんて、小さな安心を覚えながら、あーしは眠れぬ夜に目を閉じ続ける。
結衣や雪ノ下さんは、ヒキオの寝顔を見た事あるのかな…。
……。
あーしは静かに身体を起こし、静かに眠るヒキオに近寄る。
柔らかそうな髪に触れながら、ヒキオの寝顔を覗こうとーー。
「……っ」

気付けば、もう少し近寄ればキスが出来るほどの近さにヒキオの顔がある。
意外と長い睫毛と綺麗な肌。
ほっぺを触ると確かに感じる暖かさ。
「…ふふ、可愛い…」

もっと近くで見ていたい。
優しく頭を撫でて欲しい。

……でも今は…。

……今はこうやって、ヒキオの暖かさを近くで感じることが出来れば幸せなのかもしれない。

恐怖の寒さに友情を

会いたい時ほど忙しい。
あーしはテレビの中で女優が言っていたセリフを鼻で笑い飛ばす。
アホか。
会いたいのなら忙しくても会いに行け。
例え仕事が山積みであろうとも、例え熱が４０度あろうとも、例え親族が危篤な状況にあろうとも、本気の『会いたい』を押さえつけることなんて出来ないのだから。
ふと、あーしはＬＩＮＥでメッセージを打ち込む。

優美子ーーーーー
今から会える？
ーーーーーーーーー

そわそわと返信を待つ時間すら、どこか幸せに感じるのは気のせいだろうか。
送り終わったばかりのメッセージを開いては既読の有無を確認する。
一体、あーしは何をしているんだ…。
なんて、既読の付かないメッセージに気を落としそうになっているときーーーー。

ヒキオーーーーー
仕事。
ーーーーーーーーー

「……」

どうやらヒキオは仕事を優先するらしい。

……ふむ。

仕事熱心で良きかな良きかな。

…あう。

ーーーーー☆

……

……

…

・

・

・

『優美子は…。

いや、何でもない』

彼は偽りの笑顔をあーしに向けた。

高校を卒業して以来に再会した彼はやはり格好良く、以前にも増して優しくあろうとしていた。

水商売に手を染めたあーしを見て、彼は何を言おうとしたのか。

あーしの気持ちを知っていながら、最後まで無干渉のままで在り続けた彼。

きっとまた、心にも無い取り繕った言葉を並べようとしたのだろう。

『…今度、皆んなで飲みに行こうな。それじゃあ』
あーしは心の底から黒い何かに染まっていく。
彼が見せた憐れみの瞳は忘れない。
彼があーしを側に置いていた理由は知っていた。
雪ノ下雪乃に向いている好意も気付いていた。
それでも、必死に気持ちを伝え続ければ、きっと振り向いてくれると……。
そう、願っていた。

・
・
…
……
……

「ゆ、優美子ちゃん？…大丈夫？」
「っ！」
肩に触れる乾燥した手のひら。
ざらざらと気持ちの悪い感触が、悪い夢を覚ますよう、あーしにへばり付いていた。
いつもの中年は、あーしの顔を覗き込みながら臭い息を吐く。
「どうしたの？気分悪い？」
あんたが隣に座った時から気分はずっと悪いし。
頭の中でそう腐しながら、ぼーっとしていた頭から嫌な記憶を消していく。
なんで、思い出しちゃうんだろう。
1番忘れたい記憶ほど、頭の端っこに留まり続けてあーしを苦します。
ここ最近は、思い出す事も少なくなったのになぁ…。
「ね、ねぇ、優美子ちゃん。こ、この前に僕が上げた指輪はハメてくれてる？」

「あ、あぁ…。うん、付けてるよ」
指輪をハメている指を胸の位置まで上げて見せつけると、中年はおっさんらしからぬだらしの無い顔でそれを見つめた。
「あふふ。可愛いよぉ。似合ってる。本当に…」
「…ありがと」
背中を冷やすようなゾッとした喋り方。
何だろう。体調でも悪いのか、先程から不安と恐怖が混ざったような重い膨らみが肩に乗っかる。
「あ、あーし、他の客から指名入ったから席外すね」
「え…。そんな、まだ１０分も経ってないよ？」
肩を撫でる中年の手に力が込もる。
身体を過る恐怖から、あーしは少し慌てて席を立った。
どんな客が来ようと、怖いなんて思ったことは一度も無かったのに……。
どうしちゃったんだろ、あーし…。
その場から離れ、あーしはそのまま店裏へと駆け込む。
気付けば息も上がっていた。
「…っ」
早まる動悸は止まらない。
結局、通りかかったスタッフに早退する旨を伝え店を出た。
この時間なら急げば終電に間に合う。
そのままお風呂に入ってベッドに潜ろう。
１日寝れば、こんな恐怖はきっと消えるから。
早歩きのヒールが鳴らす音が、街の中に溶け込んでいく。
終電に乗るために選んだ道は、どこか物悲しく、人の気配を感じさせなかった。
ざっざっざ。
「……っ！」
それは地面を平らな靴底が歩き鳴らす音。

気のせいだと思い込むには、背後から聞こえるその音は大き過ぎた。

ざっざっざ。

あーしの歩くスピードに合わせて早くなる音が着実に恐怖を増長させていく。

ーー気を付けろよ。

気付けば、手にはスマホを握りしめていた。

スマホから流れ出すコール音。

「…っ、お願い、出て…」

1度、2度……、5度目のコール音が途切れる。

『……。お掛けになった電話は、心底面倒な事になりそうだと察知した俺の予感により現在使われていないこととなりました』

電話越しに聞こえる声は確かにアイツの物だった。

脚から思わず力が抜けそうになる。

声を聞いただけなのに、重くのしかかる恐怖が、ゆっくりと溶けていき、甘ったるく心地の良い感情が充満する不思議…。

「!…ひ、ひきお…」

『……随分と、女性らしい声を出すようになったな、三浦』

「…あ、あの、今、あーし…」

『……。』

「…っ。ぅぅ、来て…、お願い。…怖い…っ」

声が震える。

格好の悪い姿を見せたくないのに。

でも、そんなプライドさえも失う程に怖かった。

『…分かった』

「っ!」

ーーちょっと待ってろ

その言葉は魔法のように、静かに落ちるあーしの心を温めた。

電話でヒキオに指示を受けながら、あーしは背後の足音から逃げる。

追われる恐怖がこれ程だとは思わなかった。

ああいう仕事に就いているのだから、ある程度の覚悟はしていたが、そんな小さな覚悟は見事に粉砕される。

怖い。怖い。…怖い。

……もう、嫌だ…。

そう思った時に。

あーしの腕が誰かに掴まれた。

「…っ!!」

掴まれた腕から伝わる体温が、すごく暖かい。

程なく、目から涙が溢れ出す。

目の前の彼に恥じらうこともなく。

あーしは普通の女の子のように泣いていた。

「…よう。たまたま近くに居たから来てやった…、いや本当に」

「…っ、う、うぅ」

息を切らして、飛び出たワイシャツに汗を染み込ませた彼は、近くに居ただけと主張する。

そんな、どこか子供染みた言い訳をする彼に、あーしは抱き着きたくなるほどムカついた。
思わずしがみ付いた彼の胸は甘く香り、暖かく、あーしをそっと包み込む。

「…う、うえっ、うううっ！ひ、ひきおー…っ」
「…あーあー、もう。泣くなよバカ…、っておまえ！鼻水をワイシャツに付けんな！」
「あぅ…」
「…ほら、歩け」
「うう。腰が…、抜けて…」
「腰は抜けないから大丈夫だ。頭のネジは抜けてるっぽいけど」
「も、もっと優しくしろしぃ～っ!!」
こんな状況でも普段と変わらない態度のヒキオの態度に、あーしは次第に落ち着きを取り戻す。
ヒキオに抱き着きながらあれやこれやと言い合っている内に、気付けば人通りの多い場所へと辿り着いていた。
「…も、もう平気。…ヒキオ、その…、ありがと」
「ん」
そう言うと、ヒキオは繋いでいたあーしの手をゆっくりと離した。
名残惜しく、離されたヒキオの手をじっと見つめていると、ヒキオが辺りを静かに見渡していることに気付く。
「…どしたん？」
「……。いや、何でも」
一通り見渡すと、小さなため息を吐きながら、ヒキオはあーしに振り返った。
コツン。と。
頭を優しく叩かれる。
「あぅ…」
「…気を付けなさい。バカ女」
「…うん、ごめんなさい」

そうやって諭すような口調で喋るヒキオがおかしくて、溢れていた涙はゆっくりと止まっていた。
ふわりと揺れるシャボン玉みたいに、あーしの背負っていた重たい何かが夜空へと浮かんでいく。
「さぁ、もう帰ろうぜ」
「…はい」
「……。なんで敬語？」
「そんな気分なの。…ねぇ、助けに来てくれてありがとね」
「何度も言うな。気持ち悪い」
「へへ。照れんなし」
華奢に見えたヒキオの背中がとても大きく。
照れるように前を歩き出したヒキオの腕に、あーしは思いっきり飛び付いた。
赤く染まる頬が熱いのは気のせいか。

「…ありがと」

常識外れに常識を

……
……
…
・
・
・

『ヒッキーのバカっ！一緒に帰ろうって言ったじゃん！』
朝、教室に着くなり聞こえる結衣の声。
結衣はアイツと話す時だけ、いつもより少し幼気な喋り方になる。
大きな瞳、コロコロとした綺麗な表情、天然で可愛げのある素直な性格も相まって、結衣の事を好きだと言う男子は後を絶たない。
それにも関わらず、結衣に浮いた話が無いのは全てアイツのせい。
アイツはそんな結衣に話しかけられていると言うのに、視線を合わすこともなくスマホをいじっていた。
『…昨日は見たいアニメがあったんだよ』
『それ、おとといもその前の日も同じ事言ってたしー！』
ぺんぺんとアイツの頭を叩きながら、戯れる犬のように結衣は跳ね回る。
そんな2人の姿を席から眺めつつ、あーしは無意識に舌打ちをしていた。
何で結衣は、あんな男に構うんだし…。
根暗そうで何を考えてるのか分からない。
時折見せる、人を見透かしたような目も気に入らない。
ふと、あーしはテコテコにデコったスマホを取り出した。

数え切れない人数を抱える連絡帳を開き、先日に合コンで知り合った男のアドレスにメールを送る。
結衣も良い男を捕まえれば目が覚めるはずだ。
この前に知り合った歳上の男は顔立ちも気前も良かったな。
よし…。

Ｆｒｏｍ　優美子ーーーー
Ｔｏ　＊＊＊
ねえ、紹介したいコがいるんだけど。
ーーーーーーーーー

・
・
…
……
……
……

ーーーーー★

繁華街が騒がしくなる時間帯。
あーしはいつものように裏口から店へと入り、鏡が並ぶ衣装室の扉を開ける。
既に出勤していた同僚の子に軽く挨拶を交わしながら、化粧道具を取り出した。
「うぅ～。優美子ちゃん、今日も貧困層しか指名してくれないよぉ～」
「指名されるだけ有難いと思いな」
「冷たい！…優美子ちゃんはイイよね。個室指名の柴山さんが付いて

るし」
彼女は泣き真似をしながらあーしの肩を強めに揺する。
化粧の邪魔だとソレを振り払うも、相変わらず目尻を拭く演技をしながら文句を吐き続けた。
「ねぇねぇ、どうやったら常連さんが付くの？やっぱり同伴？」
「バカ。同伴なんて絶対にしちゃだめだかんね。…どうやってって言われても、ただあーしは普通に…」
「その普通を教えて！」
自分で言っておきながら、普通とは何なのかと考えた。
特別な事をしているつもりもないのだが、あーしには割と多くの常連客が付いている。
……むむ。
なんでだろう…。
頭を捻るも答えは出ず。
とりあえず、適当な返答をしておく。
「まぁ、話を合わせたり、盛り上げたり、…好きな食べ物を聞いたり？」
「それ合コンのテクじゃん！」
……好きな食べ物。
そういえば、あーしはアイツの好きな食べ物を知らないな…。
好きな食べ物どころか、何処に住んでいるのか、どんな生活を送っているのか……、何も知らない。
あーしは話を打ち切りスマホを取り出す。
「あ！優美子ちゃんスマホのケース変えたでしょ！」
「ちょっと黙ってな。集中するから。話しかけたら打ち飛ばす」
「…はい」

優美子ーーーーー
おいヒキオ！
好きな食べ物は？
ーーーーーーーー

メッセージを送ること数秒。
以前の時差ボケを経て、ヒキオにあーしのＬＩＮＥは１分以内に返すよう調教したためか、送ったメッセージには直ぐに既読が付き返信が来る。

ヒキオーーーーー
ぶらっくさんだー
ーーーーーーーーー

ほぅ…。
それなら今度会うときにぶらっくさんだーを１００個買っていってやろう。

優美子ーーーーー
嫌いな食べ物は？
ーーーーーーーーー

ヒキオーーーーー
パクチー
ーーーーーーーーー

優美子ーーーーー
顔文字とか無いから
怒ってるみたい。
ーーーーーーーーー

ヒキオーーーーー
＼（＾ｏ＾）／
ーーーーーーーーー

優美子ーーーーー

殺す／（＾ｏ＾）／
ーーーーーーーー

一言だけが返ってくるメッセージ。
ほんの少しだけ物足りなく感じてしまうが、これはこれでヒキオらしい。
無意識に、あーしはスマホを眺めながら笑っていたらしく、隣に座る彼女があーしを不思議そうに見つめていた。
「…優美子ちゃん、何か変わった？」
「あ？スマホケースなら先週に変えたけど？」
「ち、違うよ！…その、なんか…、すごく柔らかい笑顔だったから…」
柔らかい笑顔。
彼女はあーしの顔を見てそう言った。
たとえば、接客している時のあーしは可愛い笑顔を貼り付けている。
裏でこうして話している時のあーしは、大人な笑顔を貼り付けている。
…ヒキオといる時のあーしは…。
きっと柔らかい笑顔を浮かべているのだろう。
それは頬が緩んで眉が下がるような、そんなだらしの無い笑顔だ。
あーしはスマホを仕舞い鏡を見つめる。
…アホみたいにだらし無いし。
でも、アホ可愛い。
今のあーしはアホ可愛いのだ。
あの時の…、高校生の時の結衣のようなアホ可愛い自分がそこに居た。
「…変わった…、のかな…」

・
・

☆

「で、ヒキオもそう思う？」
「……」
ムスッとしながらあーしが買ってきたぶらっくさんだーを食べるヒキオ。
「あーしのアホ可愛いさって何レベルくらいだろ…」
「……」
「ねぇ、何レベだと思う？」
「…なんだよ、アホ可愛いさのレベルって…。つか、色々と言いたい事があるんだが…」
普段からの定位置であろうソファーに腰深く掛けたヒキオは、ため息を吐きながらあーしをジッと睨みつけた。
「なんでウチを知ってる…」
「く、黒魔術で…」
「…嘘のクセがすごいな」
「へへへ」
呆れるヒキオを見ながらあーしは笑う。
今朝、オートロックで塞がれた入り口を見たときには青ざめたが、なんとか住人の後を追う形でマンション内に入ることが出来た。
玄関先であーしを見て驚いたヒキオの顔は堪らなく間抜けだったな…。

「土曜の朝から何なんだよ。ぐーたらさせてくれよ。本当ならまだベットの上でぐーたらぬーぼだったんだぞ？」
「お土産も買ってきてやったんだし文句言うな！」
「この大量のぶらっくさんだーは嫌がらせだろ！」
　テーブルの上に山積みになったぶらっくさんだーはまったく減る気配を見せない。
　ふと、ヒキオはぶらっくさんだーを幾つか取り、袋に詰め込んだ。
「なに？おすそ分けするの？」
「こんなんお隣さんに押し付けられるかよ」
「こんなん言うなし！返せ！あーしのぶらっくさんだーを返せ！」
「おう！持ち帰ってくれ！」
「えぇ!?い、いらん…」
　押し付け合うぶらっくさんだーは悲しそうに袋の中に詰め込まれている。
　なんだし！
　好きだって言うから買ってきてやったのに！
「…はぁ。どっちにしろこのままじゃ食べ切れんだろう」
　そう言うと、ヒキオはおもむろに立ち上がり、キッチンへと向かうと、冷蔵庫から何かを取り出し、フライパン、ボール、ホイッパーを用意した。
「この手のスナックチョコは砕いて溶かせば有効活用することが出来ます」
「ほぉ。例えば沢山のぶらっくさんだーを1つの巨大ぶらっくさんだーにするとか？」
「……おまえの頭はドラえもん以下だな」
「なにをー!!」
　水玉模様のエプロンを身に付けたヒキオに手招きされ、あーしもキッチンへと向かう。
「おまえはぶらっくさんだーを開けてこのビニールに全部入れろ」
「??」
「作業工程は順を追って説明するから指示に従いなさい」

「…はーい」

……

…

・

工程はさほど複雑な物ではなかった。

まずは大量のぶらっくさんだーを開封し、それを袋に詰めて粉々に砕く。

この際にスナップを利かせ過ぎて袋が破けてしまった。

次にそれをボールに入れ、沸騰した鍋で湯煎する。

この際に、沸騰したお湯へ直接入れようとして怒られてしまった。

次に卵と牛乳を混ぜ、その中にホットケーキミックスを投入する。

この際に、味見しようとした現場を取り押さえられて頭を叩かれた。

最後に、湯煎して砕け溶けた無惨な姿のぶらっくさんだーを混ぜ込んだホットケーキの元に入れる。

この際に、湯煎されて熱々になったチョコが手に飛び火傷した。

……

…

・

「なーるほどね。ホットケーキｗｉｔｈぶらっくさんだーを作るわけか」

「……キミ、いちいち面倒事を起こさないでくれます？」

「後はコレをフライパンで焼くだけだし！」

「待て待て！慌てんなバカ！強火だと表面が焦げるぞ！」

「落ち着けヒキオ。料理の基本は冷静さだかんね」

「ぶっ飛ばすぞてめぇ！」

弱火で熱しられたフライパンに、あーしはホットケーキの元をゆっ

くりと垂らす。
　じゅーじゅーと鳴る音に加え、香ばしく甘い香りが充満すると、ホットケーキの元はあっという間にこんがりとした焼け色を見せた。
「そろそろひっくり返す？」
「そうだな。…出来るか？」
「当たり前っしょ。あーし、お好み焼きとかめっちゃ上手に作るかんね」
「…まぁ、うん。そう、なのか？」
　ヘラを両手に持ちチャンスを伺う。
　躊躇っては失敗する…。
　チャンスは１度。
　眼光鋭くその機会を待ち続ける。
「……!!今だし!!」
「っ!?」
　すっ、ふわ、…くるん。
「ほれ見たことか！ね!?ね!?上手いっしょ!?」
「うん。…いや、これくらいでそんなに威張られても…」
　両面が美味しそうに色付いたホットケーキをフライパンから救い、ヒキオが用意したお皿へと移す。
　我ながら上手に出来たものだ。
　ぶらっくさんだーが醸し出すチョコの濃厚な香りが相まって、あーしは思わずヨダレを垂らしてしまった。
「…なにコレ。最強なんですけど…」
「ん。あとははちみつとバターを乗せれば完成だな」
「早く食うし！」

ーーーーーー☆

「…ふう。めっちゃ美味かったし」
「あぁ。ふんわりとしたホットケーキとそれに混ざるぶらっくさんだーの食感が最高だったわ」
気付けば空になったお皿を眺めつつ、あーしは名残惜しくもお皿に残ったはちみつを指ですくい舐める。
甘い…。
テレビから聞こえる奇妙な芸人のリズムネタすらも心地の良いＢＧＭになり、ホットケーキの残り香か、それともヒキオから漂う甘い香りか、部屋の中には幸せな空気で包まれた。
「…こんなんも偶にはいいね」

そう、小さく呟いてみる。
久し振りに再会した同級生と、いつの間にか距離が近付き、緩く流れる空気を共に吸う。
再会の場所が場所なだけに、それは少女漫画のように健全なものではないのかもしれない。
それでも、こうして感じるヒキオの柔らかさが、酷く固まっていたあーしの何かを優しく溶かす。
不思議……。
どうしてこんなに暖かいんだろ。
どうしてこんなに心地良いのだろう。
どうしてこんなに…。
愛おしいんだろう…。

お腹が満たされ眠くなったのか、ウトウトと目を細めるヒキオを見つめる。

芽生えた感情が顔を出すように。

「……ねぇ、ヒキオ」

「…んぇ？」

「…あーし…」

「……」

優しく。優しく。

それはふわりとーー。

「…っ。つ、次はホットケーキｗｉｔｈパクチーを作るし!!」

またの機会を伺って。

そっと身を潜めた。

「…パクチーとか食べ物じゃねえよ」

甘い砂糖と買い物を

雲ひとつない晴天の下で、ロングスカートとカーディガンといった露出度の少ない格好で街を練り歩く。
待ち合わせ時間にはまだ早い。
このままゆっくり歩いて行っても２０分前には待ち合わせ場所に着くだろう。
時折、店が構える大きな窓ガラスで前髪をチェックしながら、赤く染まる頬に照れてみたり…。
ふと、待ち合わせ場所に見えるアホ毛の姿。
まだ待ち合わせの時間には早いのに。
へへ、思わずスキップしちゃいそう…。
「おーい！ヒキオー！」
「…む」
「早いね！偉い！」
あーしはぴょんぴょんと跳ねるアホ毛を押さえつけるように頭を撫でてあげる。
ヒキオはそれを嫌そう振り払うと、手をポケットに入れた。
「あーしと会うのが楽しみで早く来てしまったと…」
「はぁ、おまえの頭は甲殻類か」
「!?」
「それで、買い物に付き合えって、何を買う気なんだよ？」
「おっと、それはお店に行くまでのお楽しみだし」
「靴か？服か？それともアクセサリーか？言っておくが、俺の財布には３０００円しか入ってないからな」
「ぶー！別に奢ってもらおうなんて考えてないっての。まぁ、付き合ってくれるお礼に昼飯くらいなら奢るけど？」

あーしの発言に訝しげな表情を浮かべながらも、ヒキオは了承を表すように小さく頷いた。
雑踏に紛れながら、目的地へ向かって歩き出す。
休日のためか、普段以上の人混みを見せる街は、どこか嫌いじゃない騒がしさに包まれていた。
「じゃ、行こっか」
「あいよ」
「手は繋ぐ？」
「なんの冗談だよ」
「あはは。迷子になんないでよね」

ーーーーー☆

たわい無い会話をしながら歩くこと数分。
疲れただの脚が痛いだのと我儘を言うヒキオが途端に足を止める。
何事かと思い振り向くと、ヒキオはそこから動こうとせずに、お腹に手を当てながらあーしを見つめ続けた。
「…？どしたん？」
「ざわつく…」
「は？」
「お腹がざわつく」
「お腹減ったの？」
「おう」
ざわつくって…。
お腹が減ったのならそう言えし。
頭の一つでも叩いてやろうとした時に、なんの気まぐれか、あーしのお腹もぐぅ～、と、ざわついた。
「あーしもざわついたし」

「昼飯にしようぜ。タダ飯タダ飯」
「あんたには男のプライドがないのか」
「そんなもん妖怪に食べられちまったよ」
「なんだしそれ。…まぁ、時間も時間だしね。どこ行く？」
ヒキオはビシッと指を指す。
どうやら尋ねるまでもなかったようで、ヒキオが足を止めた場所にはファミリー層に人気なレストランが。
「サイゼ？ヒキオ遠慮してんの？もっと高い所でも良いんだよ？」
「ここには価値以上の物があるんだよ」
「ふぅん。ま、何処でもいいけどさ」
ちらりと店内を覗くとやはり家族の客が多く見られた。
あーしとしてはもう少しオシャレな所で良い雰囲気な食事をしたかったが、頬を柔らげるヒキオの顔に、落ちかけた肩が軽くなる。
「おし。入るぞ？準備はいいな？」
「おっけー」
「失礼します」
「え!?」
店内に入るや直ぐに、店員さんがあーしらをボックス席まで案内してくれた。
ドリンクバーに走る子供達が可愛らしい。
「久しぶりに来たし」
「俺も久しぶりだわ。実に3日ぶり」
「はいはい。あーし何にしようかなー」
「すみませーん。注文お願いしまーす」
「ちょ！あーしまだ決めてないんだけど!?」
……
……
・…
…
・

ーーーーで。
運ばれた料理を食べ終え、食後のコーヒーに落ち着いている頃。
ヒキオは窓の外を眺めながら、コーヒーカップを丁寧に傾けている。
そんな姿に少しドキっとさせられるも、テーブルに散乱したスティック砂糖の数が雰囲気をぶち壊した。
「あんたの身体は半分が糖分で出来てるんだろうね」
「…なにそれ、めっちゃ素敵」
ふんわりと柔らかく頬を緩ませる笑い方。
下手に作り笑いをしないヒキオが、こうやって優しく微笑んでくれるとどこか心が温かくなる。
あーしと一緒に居て楽しいんだ、と、安心できる。
「ヒキオは、心がふわふわすることってある？」
「…あー、山積みの仕事と納期の近いタスクを見ると心がふわふわするな」
「違うっての。なんて言うか、非日常って感じの…」
例えば、中学生の頃に経験した初めてのデートとか、高校生の頃に大人ぶって開催した合コンとか、まるであーしは特別なのだと勘違いしていたあの頃のような高揚感。
気付けば大人になり、男と出掛けても、プレゼントを貰っても、そのふわふわとした幸せな感覚は味わえなくなる。
映画やドラマを見て、偶にその感覚を思い出しても実感することはなくなっていた。
「…ヒキオは、す、す、す、好きな奴と居るときに、どきどきしたりするの？」
「…ぷっ、なんだよどきどきって。つまりは恋愛感に理性を失うかってことだろ？」
「小難しい言い方すんなし」
「…んー、俺は中学生の頃の黒歴史が強すぎて、そうならないように自

制してる所があるからな」
「自制…？」
　何かを思い出すように、それでも柔らかく、ヒキオはふわりと言葉を紡ぐ。
「雪ノ下や由比ヶ浜には偶に揺らいだし」
「そそそそそそれって！す、好きだったってこと!?」
「好きだったのかもなぁ…、今となっちゃ分からんが」
「こ、こいつ…、あっけらかんと…」
「でも、結局分からず終いだ」
「そ、そうなんだ…」
　困ったような表情を浮かべながらも、ヒキオは淡々とその話をしてくれる。
　もう、割り切ってしまったのだろうか、それとも、その感情を失ってしまっているのか。
　少なくとも、大人になって失われるその感情が、あーしには戻りつつある。
　どきどきして、身体が熱くなって、笑顔が溢れそうになるような感情。
　この年齢になっても尚、女性は皆乙女なのだと。
　あーしらしくもない事を考えて。

「そ、そのどきどきを……」
「あ？」
「そのどきどきを!!」
「お、おい、あまり大きな声を出すなよ」
　慌てるヒキオを他所に、あーしは膝で強く握りしめられた自らの手を見ながら、ふわふわとした思いを抑制することもなく勇気を振るう。

「そのどきどきを…、あーしにも感じてくれたら…、嬉しい…です…」

……
……
……
……
……

当時流行っていたＳＮＳで、その画像は出回った。
か細く綺麗な首筋と、きめ細やかな肌に膨らむ胸。
顔は口元しか写っていないものの、その画像の被写体が可愛らしく若々しい女性であると、その露出された胸が言い示す。
ホテルのベットらしき所で撮られたであろうその画像は、瞬く間に学校中に広がった。
裸の彼女を包み込むような筋肉が程よく付いた腕。
男性の物であろうその腕からは人物を特定することは出来ない。
だが、女性は違った。
整った顎元の輪郭と、柔らかそうに艶のある唇。
…首に光るシンプルなピンクのネックレス。
無関係な者には分かりようのない小さな証拠だが、学校内で彼女に関わる者には明らかな証拠となった。
ふと、思い出す。
そのピンクのネックレスをアイツに貰ったと飛び跳ねる彼女の姿。
皮肉にも、そのネックレスが彼女だと特定される証拠になるなんて。

『…なに、これ…』

彼女は小さく呟いた。

朝のホームルーム前の時間に、彼女が教室へ到着した頃にはその画像はクラス中に出回り、挙句、人物まで特定されていた。
ざわつく教室で、例の画像を見た彼女は絶句する。
好奇の眼差しに晒された彼女に、あーしところか、隼人でさえも救いの手を伸ばすことは出来ずに。

『ねぇ、結衣ちゃぁん。この画像、まさかじゃないけど結衣じゃないよね？』

相模がわざわざ皆んなに聞こえるよう大きな声で質問する。

『わ、私…、こんなの…』

『でもさー、この画像に写ってるネックレス、結衣ちゃんのと同じだよねー？』

その問いに、彼女はネックレスを大切そうに握りしめる。
それでも外そうとしないのは、そのネックレスの送り主への心遣いか、それとも…。
尚もざわつく教室。
ふと、ホームルームの鐘が鳴る寸前に、アイツは現れた。

『……ヒッキー…』
『…え、なにこの状況。なんでおまえ泣いてんの？』
『…私、違うの…っ！』

隼人が事情を掻い摘んで話すと、何かを察したように、そいつは静かにため息を吐く。

『…違わんだろ。コレ、どう見てもおまえじゃん』
『っ！』

そいつは冷たく言い放つ。
冷たい言葉、それなのに、表情はどこか優しく困ったような。
手の掛かる妹を助ける兄、そんな感じ。

『ひ、比企谷！待て！』

その表情を見た隼人が慌ててそいつに向かって何かを言おうとしたが、それよりも先に、そいつは口を開く。

『……。俺が腹いせにやった。…おまえに振られた腹いせに、無理やりホテルに連れ込んで、寝てる時に撮った写真だ』

・
・
…
……
……
……

時間の進みに戒めを

あーしにも感じてくれたら…、嬉しい…、です。

…アホじゃん。
あーし、アホじゃん！
枕に顔を埋めながらに昼間の事を思い出す。
なんであんな事を言ってしまったのだろう。
あんなのほぼ告白みたいなもんじゃん！
ただの告白じゃん!!
戻してよ…。
時間を戻してよ!!
そうしたら、あーしはそんな事を口走るあーしをぶっ飛ばしてやるのに……。
「…うぅ。なんで、あーし…」
日付が変わる時間、だんだんと悶々としてきた頭を枕に何度も打ち付けた後に、あーしはふんわりとため息を吐く。

『…え？なんだって？』

まさかの難聴系男子で助かった…。
いや待て、ヒキオのことだから聞こえていても聞こえないフリをする可能性だってある。
むしろその可能性の方が高い。

結局、曖昧なままにサイゼを出て、買い物を済まし、変わらぬ態度のヒキオは手を小さく振りながら帰っていったわけだが…。

『また奢ってくれるなら付き合ってやるよ。またな』

……。

解せぬ。

…解せぬ男だしアンタは!!

突き放すような言葉を言いながらも、荷物を持ってくれたりと優しい振る舞いもする。

引く所は引いて押す所は押す、まさに恋愛マスターの技術。

ふと、テーブルに投げ置かれたスマホが目に入る。

電話…、お礼の電話をするのは普通だよね?

別に声が聞きたいとかお喋りしたいとかじゃなくて、お礼を言いたいだけ。

だって買い物に付き合ってもらったんだから当然じゃん。

普通言うよね?お礼。

うん、言うし。

誰であろうとお礼の電話はするべきだし。

おし、電話しよう。

電話電話…。

「…ふぅ…、よ、よし。電話……」

あーしはベッドから起き上がり、テーブルに向かって正座する。

家宝を触るようにスマホを持つと、震える指で操作しながらヒキオの電話番号を表示した。

後は…、押すだけ…。

押せ…、あーし!押せ!!

「ふ、ふぐぅ…、だ、だめだし!緊張して汗が…っ」

額の汗を腕で拭いながら、あーしは様子を見るべくスマホを睨み続ける。

…今だしっ!!

ぴっ。

とぅるるるー

とぅるるるー…。

『……なんだよ』

「お、お、おう!ヒキオ!?」

『そらそうだろ』

「あ、え、へへ。いや、なに?お礼って言うの?今日は買い物に付き合ってくれたから…」

『いらん。もう寝るから切るぞ』

「ま、待てし!あんた!人がお礼を言おうとしてるのにそれを無碍にするの!?」

『……』

「常識がないし!あんたには常識ってやつがないし!!」

『こんな時間に電話してくるお前に言われたくねえよ』

電話越しでさえも分かる、ヒキオの呆れた顔。

数秒おいて、抑揚の無い声が小さく呟かれた。

『…最近どうなんだ?』

「え?どうってのは?」

『…ストーカー。あれ以来、ストーカーの気配とか感じないのか?』

「…ん。まぁ、ヒキオに言われた通り、あんまり夜は出歩かないようにしてるし」

『そうか…』

「うん…」

『……』

「ふふ」

『…何笑ってんの?』

「えへへ。…なんかさ、顔も見えないのに、ヒキオの表情が想像出来る」

『……』

「声しか聞いてないのに…、凄く暖かい。お布団の中に居るみたい」

膝を抱きながら聞く声はとても暖かい。

自然と緩む頬も、今は誰にも見られることはないから緩みっぱなしでだらしが無い。

続く沈黙すらも心地良いのだから不思議なものだ。

「ねぇ、ヒキオ…」

『…あ？』

「教えてよ」

『…』

「アンタがあーしに優しくする…

本当の理由を」

……

……

……

…

・

・

『君は本当にバカだね。お姉さんが居なかった大変な事になってたよ

?』
『…今時珍しくないでしょう。高校生がラブホで写真を撮るくらい』
『本気で言ってる?童貞の癖に』
『それ、関係ありますか?』
そんな会話が繰り広げられていたのは放課後の部室棟の一角だった。
ほとんどの生徒が近寄る事のない場所で、あーしは身を潜めながらその会話を盗み聞きしていた。
『ま、隼人に私へ連絡させるまでが君の算段だったんだろうけどさ……、今回は本当に危なかったってことは自覚して』
『…はい』
『聞いたのがクラスに居た数名だったことと、ガハマちゃんが君の無理やりって所を訂正してくれたから大きな問題にはならなかったけどさ』
『由比ヶ浜ハマハマですね』
『それあるぅ〜。……ってふざけんじゃないの』
ゴチン、と。
ゆっくりと振り落とされた拳が彼の頭に当たる。
思いの外強かったのか、叩かれた所を自らの撫でつつも、彼は済ました顔であり続けた。
『…君にしては、少し冷静さに欠けた判断だったかな』
『……』
『…。そんなにガハマちゃんが大事?それとも、君は目の前で困ってる人が居たら、なりふり構わずに自分を犠牲にするの?』
彼はしばらく無言のまま目を逸らし続けた。
困ったように眉を寄せる。
『…そんなわけないでしょ』
『…』
『…雪ノ下と由比ヶ浜だけですよ』

ふわりと。

『…怒られるかもしれませんけど、俺はあいつらが傷付く姿を見る方が、自分の痛みよりもずっと堪えるんです。だからーーーー』

その言葉は幸せな色をして。

『ーー2人の前では、格好つけておこうかと』

甘く溶けるガムシロップのように充満していく。

『…ぷっ、何ソレ。全然格好良くないよ?』
『え、ダークヒーローみたいで格好良いでしょ?』
『はいはい。はぁ、まったく呆れちゃうよ。……流出画像の件は私に任して。知り合いに、その手に強い人が居るからさ。…でも、ガハマちゃん本人のことは…』
『雪ノ下に任せてます』
『君もケアしてあげなよ!?』

そんな会話の聞こえる物陰で、あーしはジッと、自らの存在を消すように佇んだ。
自らの犯した過ちを隠すように。
彼の偽りない言葉に悔しさを滲ませ。
あーしはその場から静かに離れていった。

ゆるりと甘い口溶けを

アイツの停学が明けた日の朝。
現れたアイツの姿に、教室の喧騒は嘘のように静まり、何処からともなく、悪意に満ちた視線ばかりが集まった。

『あ、あの、ヒッキー…。ヒッキーっ!!』

気丈にも、アイツが停学になってから1日たりとも学校を休まなかった結衣の呼び掛けにアイツは答えない。
相変わらず憎たらしい程に無関心な表情で、席へ着くなり机へ突っ伏して寝てしまう。
気付けば、あーしは何度も何度も酸素を吸い込んでいた。
吐く事さへ忘れ、吸い続けられた酸素がお腹へ溜まる。
そんなあーしの様子に気付く事もなく、教室の片隅を陣取っていたグループの1人が、小さくない声で悪意を発した。

『ほんとに来たよ…、レイプ魔。辞めちゃえば良かったのにさー』

その声に、結衣が目を見開く。
怒りを抑える事もなく、結衣はその声の主の元へ歩き出そうとするも、隼人により静止させられた。

『…相模さん。あんまり言ってやるなよ…。…っ、結局、ヒキタニが……っ』

ーーー全部悪いんだ。

隼人の口元が悔しげに強く歪む。

そんな事を隼人が言うと思っていなかったのか、教室中に居る誰もが驚くように隼人を見つめてた。

善人であり続ける彼の言葉とは思えない。

ただ、その言葉により、結衣へ向けられていた汚い視線が、全て敵意となってアイツへと向けられたのは確かだった。

・

…

……

……

……

……

……

眼が覚めると、時計の針は昼過ぎを指していた。

平日の昼間にやる事があるわけでもないが、とりあえず身形を整えるべく浴室へと向かう。

シフトを減らしてもらってから、こんな朝をよく迎えるのだが、やはり何かをやっていないと落ち着かない性格なのか、何の予定も無く出かける事が多い。

ふと、昨夜の電話を思い出す。

ーー本当の理由を…。

『……それを聞いてどうするんだ?』

それは…。

『気にしなくていい。おまえはいつも通りにしておいてくれれば』

何だし、それ。

それじゃぁあーしは、ただアンタに利用されてろってこと？

……いや、違うか。

利用してくれてるんだ。

こんなあーしの事を、アイツは利用してくれている。

「…いいよ。それで。あーしで良ければ、いつでも利用して…」

思わず溢れた独り言は、浴槽に貯められたお湯に触れると優しく弾けた。

そっと、右足から浴槽へ入れると、心なしかいつもより温いお湯が身体を包む。

「あーしのせいだもん。全部全部。…少し優しくされたからって、絶対に勘違いしちゃダメ…」

結衣の事も、ヒキオの事も、全部の引き金はあーしの軽率な行動が原因だ。

たぶん、ソレをヒキオも知っている。

あーしの務めるキャバクラにヒキオが現れるなんて偶然、起きるわけがないんだ。

これはきっと、ヒキオが書いたシナリオによる必然。

あーしを利用して、過去を清算するつもりなんだ。

「……」

だから、その事に気が付いてしまえば、ヒキオはあーしから離れて

いく。
だって、察しが良い女は利用しにくいもんね。
それはキャバ嬢として男を騙すあーしにも分かる事。
「…っ！利用しろし…。もっと利用して…、離れていかないで…っ」
と、説に願うのは叶わぬ願い。
あの優しいヒキオの声が、もうあーしに届く事はない。
・
…
……
「…よう」
「……っ!?な、な、な!?」
お風呂から上がり、涙で赤くなった目元を隠す事も無く、バスタオル1枚を身体に巻きつけたあーしはリビングへと戻る……。
戻るとーーー
「な、なんで、ヒキオが居るの!?」
「…鍵空いてた。ピンポンしたけど返事ないから入れてもらった」
「〜〜っ」
「不用心な奴。あれだけ気を付けろって言ったのに」
いつもコイツは突然に現れる。
あーしの気持ちの隙間を縫うように。
そっと触れて、その暖かい声を聞かせてくれるんだ。
声にならない声を出しながら、あーしは優雅にソファーへ腰掛ける

ヒキオの頭を強めに叩いた。

「いてっ」

「バカ！出てけ恋泥棒！あーしの気持ちだけは置いていけし!!」

「何言ってんの？ていうか服着ろよ」

昨夜の電話を終えて尚、コイツがあーしに近づく理由は分からない。

そもそもなんであーしの家を知っているのか。

ただ、先ほどまで冷め切っていた心が暖かくなったのも確かだ。

浴室で泣いたばかりだと言うのに、なぜかまた涙が溢れ出てきてしまう。

ふと、気付けばあーしはフローリングに膝を付け、勢い良く頭を下げていた。

「…ごめんなさい」

「おま、半裸で土下座って…」

「全部あーしのせい…。あの時のこと、あれからの事も、全部全部あーしが悪いんだ。それなのに…、あーしは…」

壊れゆくヒキオの日常も、消えゆく奉仕部の関係も、見て見ぬ振りをしていたんだ。

そんな言葉を続けようと頭を上げるがーーー

「…ひ、ヒキオ？」

「む？コーヒーどこ？喉乾いちゃった」

ヒキオはソファーから姿を消し、キッチンへと向かっていた。

「ちょ、ちょっと！まじめな話をしてんだけど!!?」

「ああそう。おまえも飲む？」

「…う、うん。あ、砂糖なしな」
「……なんで偉そうなの？」

ーーーーで。

服を着たあーしと、平日だと言うのにラフなシャツとジーンズを履くヒキオは、テーブルを囲ってコーヒーをすする。

「ふぅ。やはりマッ缶には敵わぬか」
「…あの、ヒキオ？そんな事より…」
「ん。…全部あーしのせいって奴だろ？そんな事はどうでもいい」
「ど、どうでも…」
「言っておくけど、あの夜におまえと会ったのは本当に偶然だから」
「な!?」

思わずコーヒーをこぼしてしまう。
その真意こそ分からないが、ヒキオはやはり、何も考えていなさそうな表情でコーヒーを飲み続けた。

「う、嘘だし！だって、それなら…、ヒキオがあーしに優しくする理由がない！」
「…優しくしてないですけど」
「へ!?」
「…きみ、優しさのハードル低くない？そらストーカーに追われてるって言われれば助けにぐらい行くだろ」
「うぬぬっ…」

な、なんと…。
あれを優しさと呼ばずして何と呼ぶのだ。
コイツ…、優しさの化け物か？
普段から優しすぎるが故に、あの程度じゃ優しいとすら思えない、

優しさの化け物なのか!?

「起因に興味は無い。俺はあの男を社会から消す事さえ出来れば良いんだ」

「あの男？」

そう聞くと、ヒキオは黙って脚を組み直すのみで答えてはくれない。

教えてくれないのは、ヒキオなりにあーしへ教えない方が良いと判断したのだろう。

「…。ん、コーヒーご馳走さま。そろそろ帰るわ」

「え？か、帰る？何かあーしに用事があったわけじゃないの？」

「別に？なんか、昨夜の電話でおまえの様子がおかしかったから見に来ただけ」

「うっ、…それは」

あーしが勝手にナイーブになっていて…。

だって、ヒキオが何を考えているのか分からないから…。

…。

いや、何を考えているのかは分かるか。

ヒキオはいつも、他人の事ばかりを考えているんだ。

うん、今日だってーーー。

「…。あ、あーしの様子がおかしかったから、心配して来てくれたの？」

「…たまたまな。まじで。このへんでちょっと用事もあったし」

「…ふふ。あっそ…。ちなみにその用事ってなに？」

「不粋なことを聞くなよな」

少し慌ててソファーから立ち上がり、玄関へと向かうヒキオを追い

掛ける。
　そっと、その背中を抱きしめながら
「だ、大しゅき…、うっ…。だ！大好きぃぃー!!」
「むっ!?」
「おらぁぁっ！ぎゅぅぅぅう」
「ぐ、や、やめろ！離せバカ！」
「伝わったか!?もってけあーしの気持ち!!」
「いらん！」
「い、いらん!?」

　答えはいらない。
　ただ、あーしの気持ちだけ伝えたかっただけ。
　甘い香りを漂わせるヒキオに数分間抱き着き続ける。
　困ったように身体を硬直させるヒキオがどこか可愛らしく、この優しさに触れ続けて来た結衣や雪ノ下さんを羨ましく思ったり。

「あーしも、奉仕部でヒキオに奉仕してあげてたらなぁ…」

「…そんな卑猥な部活じゃねえよ」